版画家　前田政雄のまなざし
── 北海道八景をとおして ──

鳴海伸一（札幌大谷大学芸術学部美術学科）

要旨

北海道函館市出身の版画家，前田政雄［1904（明治 37）-1974（昭和 49）］とのご縁は私事，国画会版画部にて 2005 年に第 79 回国画会版画部にて前田賞※1 をいただいた時にはじまる。前田没後 31 年の事で，もちろん実際にお会いした事もお話させて頂いた事もなく，さらに恥ずかしいことに前田氏の作品や活動についても無知であったが，賞設定の経緯や氏の作品および制作活動を知る機会を得て，すっかり魅了することとなり，これを機会に創作版画の軌跡にも深い憧憬を受け，今日のライフワークにもつながっている。

本稿では前田が何を見つめ，何を求めてきたのか，どのような活動をしてきたのか，著者が個人蒐集した作品群 23 点の中から実作品と，『版ニュース No.6』（企画・発行／輝開 2000）および『前田政雄展―知られざる画業の全貌―』（編集・発行／北海道立函館美術館 2006）の図録を基礎資料とし，今回はその中から昭和初頭の作品『北海道八景』に視点を定め，当時の八景をめぐり版画家，前田政雄が見てきた景色と足跡をたどり，そのまなざしを探ることとした。

キーワード：前田政雄，創作版画，版画，木版画

1. はじめに

―版画家　前田政雄について

前田政雄（1904-1974）
輝開『版ニュース No.6』表紙より転載

道南函館の出身，前田政雄の生涯や画歴については輝開※2 代表の吉留直輝氏が『版ニュース No.6』にて関係者からの聞き取りをはじめ，詳細をまとめられているのでご一読いただきたい。また，2006 年には北海道立函館美術館にて前期（1/21～2/19）と後期（2/23～3/21）の会期で前田政雄展が開催され，展覧会図録ではこれまで断片的であった作品が収集・展示され，その作品はもちろんのこと作家活動の全貌が明らかになっている。

前田は明治 37 年，北海道函館に生まれ，20 歳の時に上京。洋画を梅原龍三郎に，木版画を平塚運一に学んでおり，青年期の画歴をみると出品は洋画と版画の両立がみられるが，30 歳代から圧倒的に版画の出品となっている。私観ではあるが，『HANGA』，『版』，『きつつき版画集』，『版芸術』などの同人誌への参加に加え，編集，発行にも尽力。恩地孝四郎の「一木会」，平塚運一の「きつつき會」の同人活動や，日本版画協会，国画会など美術団体の事務局長，委員や幹事などの企画や運営にも携わっている

ことから，人から慕われ，作家としての社会性も備えた頼れる存在であったのではないかと思われる。そんな前田のイメージに強い憧憬を感じざるをえない。

東京からでも積極的な道内地方公募展への出品や，ご夫人は札幌出身であり，前田の作品群の中に札幌市内の景色がしばしば出てくるのも，郷里への想いを感じる。

―前田政雄　略画歴―

1904（明 37）	12 月 4 日函館市仲浜町に生まれる
1924（大 13）	函館で平塚運一と出会う
	上京し，川端画学校洋画科に学ぶ
1932（昭 7 ）	日本版画協会会員となる
1940（昭 15）	国画奨学賞受賞
1948（昭 23）	全道美術協会展会員となる
1953（昭 28）	国画会会員推挙
1954（昭 29）	国画会事務局長を務める
1964（昭 39）	函館にて「前田政雄版画 40 年の歩み展」
1971（昭 46）	宮内庁より御用邸絵画制作依頼を受ける
1974（昭 49）	永眠。享年 69 才
1976（昭 51）	国画会に前田賞が設置される
2006（平 18）	北海道立函館美術館にて「前田政雄展」が開催される

2. 北海道八景について

前田 26 歳の画業のひとつで，はじめての連作画集とされており，「大沼公園」，「小樽港」，「五稜郭」，「支笏湖」，「定山渓」，「洞爺湖」，「中島公園」，「登別温泉」（50 音順）の八景で構成されている。図録※3によると前田が多色摺りをはじめたのは 1929 年（昭和 4 年）からと記されており，翌年にあたる制作発表のこの『北海道八景』は実に若々しくも聞こえるが，非常に丁寧で真面目な，いわゆる創作版画の中に伝統木版の技術を残したような彫り込みと摺りが随所に感じられる連作である。

何故この 8 件の景色が選ばれたのか，エディションは何枚であったか，最終的な仕上がりがどのような画集装丁で，頒布はどのような形であったか，版元との企画であったのか等々，大変興味深い点が多いが，詳細な史実・現物まで調査不足でたどり着けていない。

さて自身が蒐集している前田作品は 23 作品で，その中から実作品でも検証してみたい。八景のうち，著者が所有している作品は「登別温泉」，「中島公園」のわずか 2 点で，すでに 90 年以上を経過しているがシミ，糊跡残りがあるものの比較的良い状態で保管している。紐解き継承できるわずかな検証資料となりそうであるのでここに記し残しておきたい。

［シートについて］

マージンは画面から 12 mm～15 mm 程度の余白が加えられており，特筆したいことは画面下，左右反転で記された画題と自著のエンボス加工である。左に「自刻・摺　前田政雄」，右に画題が「北海道八景◆現地名◆」とエンボス加工がなされている。

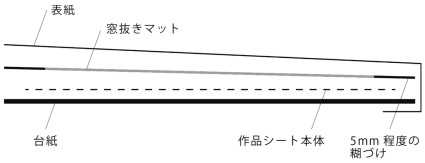
最初は凹版で空摺かと思っていたが，重ね透かし，採寸してみても同じ書体意匠とサイズになっておりエンボッサーか何かの機械的な版表現となっているのではないかと推測する。よって鉛筆などによる一般的なサインはないが，亀甲文様の中に「政」の文字が彫られた印と，直径約 14 mm のバレン文様の中に「田」，「前」と表記された 2 種の判が押印されている。しかし，この八景のうち，押印されているものと，そうではない作品もある。また，エディション表記はなく，画集として何部限定だったかも現在，明確になっていない。余白を刃物で裁断したと想定するが，右下に見当汚れが確認できるので合わせが興味深い。

［台紙について］

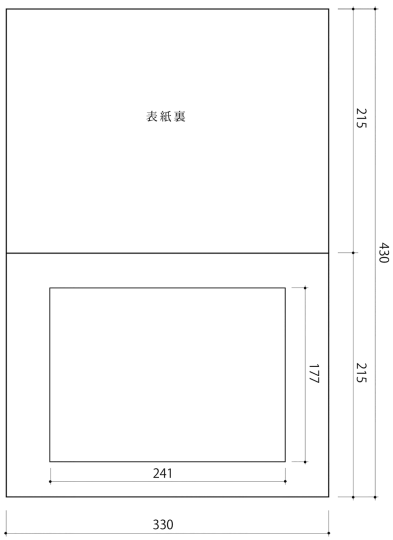
著者が所有する「中島公園」は保存状態が良く，専用の台紙も一緒に付属されており，有力な手がかりとなりそうなのでここに記録として残しておきたい。

他作品の台紙は把握できていないが連作画集であることから全作品とも同仕様ではないかと推測する。

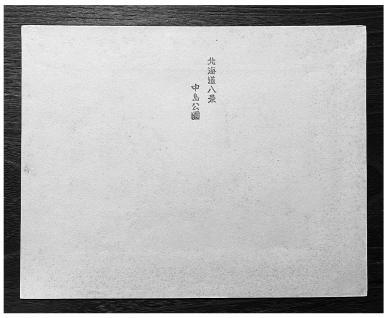
台紙は，中目程度の画用紙と思われる紙で，その上にマット代わりにもなる窓が抜かれた中厚程度の紙が貼られている。窓抜き寸法は 177 mm×241 mm でサイン，タイトルなどが記入されたシートのマージン部分は隠れる仕様になっている。さらに覆いかぶせる形で上にもう 1 枚，上辺を約 10 mm 裏に回すかたちで表紙が貼られており，中心やや上に版で画題が摺られている。なお，窓抜き紙と表紙は同じ程度の標準厚である。



仕様の詳細マット替わりの紙には上部 5 mm 程度の糊付けが施され，めくって間に差し込む仕様になっている。マージンは隠れるようになっている。

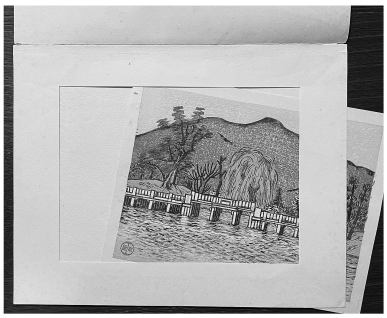


仕様採寸　小さなことかもしれないが，このような項目もアーカイブスには重要な要素である。



参考図版）表紙について
1 文字あたり 8 mm 角で画題の名称が版として摺られている。版木か印章か明確に判断できていないが，こちらもサイン・画題と同様に精巧な彫りになっている。

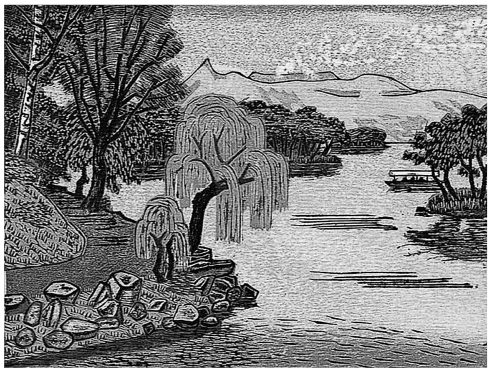
参考図版）サインについて
「雄政田前　摺・刻自」とエンボスで表記されている。バレンの印も非常に精巧である。名前のエンボスと，バレン模様の印が確認できる。90 年を経てもなおエンボスがしっかりと残っている。



参考図版）仕様について
おさまりが良いように，窓がくり抜かれた中厚の紙が用いられ，サインや画題などの余白部分は隠れる仕様になっている。このようなマット替わりに仕立てた状態のまま頒布されたのか，装丁箱のようなものにひと纏で頒布されたのか不明である。

参考図版）画題について
「◇現地名◇　景八道海北」とエンボスで表記されている。明朝とゴシックが合わさったような書体意匠で非常に精巧に彫られている。エンボッサーのような機械を用いたのか，空摺のような摺りなのか非常に興味深い。

2-2-1　北海道八景【大沼公園】



前田政雄『北海道八景　大沼公園』(所蔵　北海道立函館美術館)
北海道立函館美術館『前田政雄展』図録より転載

コロナ禍前の暑い日であったが，連結自転車などアクティビティをアジア観光客が楽しんでいた。モーターボートなど湖上遊覧も変わりなく健在である。

実作品データ

画　題／北海道八景【大沼公園】
技　法／木版多色摺り(陽刻法)
画　材／紙，水性絵具
画　寸／182 mm×240 mm
制作年／1930 年(昭和 5 年)

水色と青のグラデーションの効いた空と沼に，山，樹々，観光船が描写され，遠近感の中に風さえ感じる爽やかで優雅な画面構成の作品である。

奥には水蒸気を上げる駒ヶ岳，大沼と入り組んで浮かぶ島々が明確に描かれ，画面左には散策路と思われる路に白樺かダケカンバらしき樹，象徴的な柳の樹，古の噴火の名残かごろごろとした岩石が確認できるのでこれらを手掛かりに立位置を把握することができそうである。

現地取材・検証

〈取材日〉2017 年 8 月 20 日
〈所在地〉北海道亀田郡七飯町大沼町
　　大沼国定公園内
〈検　証〉

作品画面内から読み取る事のできる明確な要素が複数あるため，立ち位置はすぐに把握することが可能であった。

北海道庁立公園として，明治 38 年から古い歴史を持つ保養地として有名な大沼公園の入り口で，現在は駐車場から右に商店をみて大沼湖に向かって歩くと，公園広場のすぐ真正面に広がる景色である。

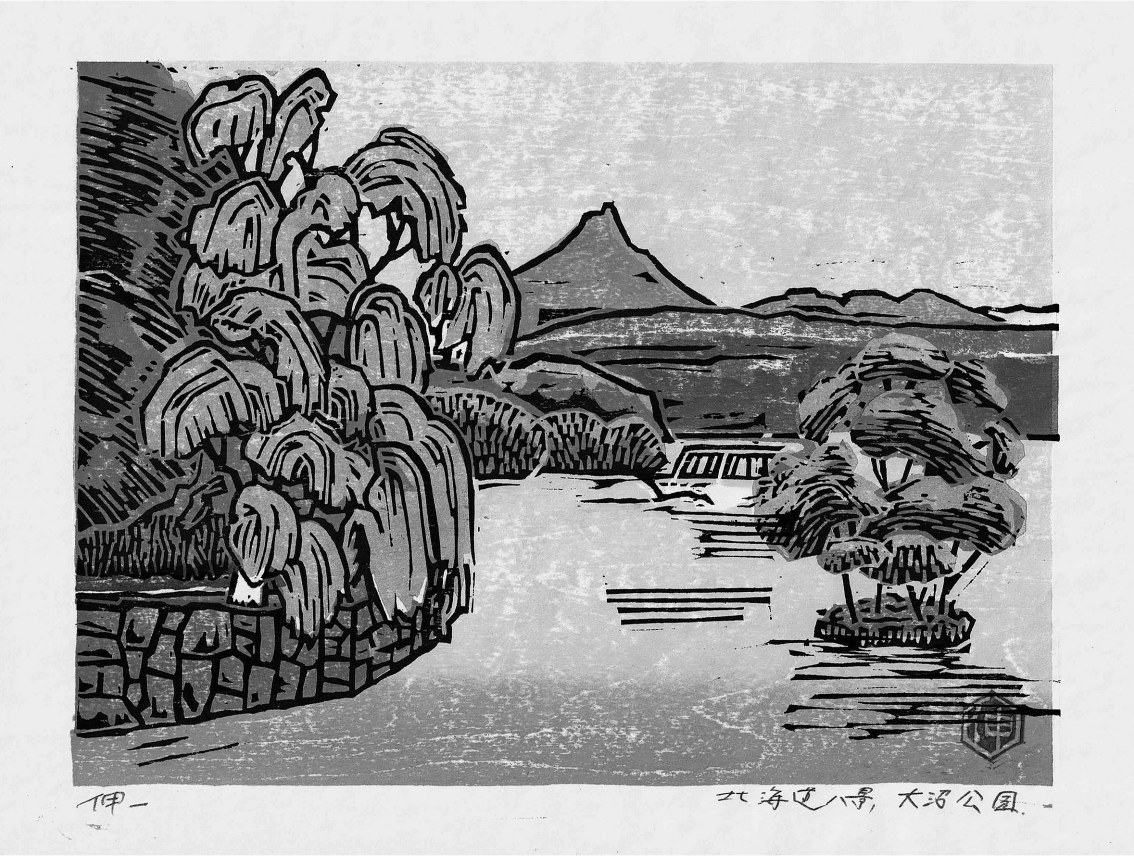
画面左の柳は現在，相当な背丈で夏には樹幹樹皮を覆うほどの枝葉の量になっており，散策路の先には後楽橋がある。奥に見える変わらぬ駒ヶ岳の姿が昔を今に伝えている。尚，発表前年にあたる昭和 4 年(1929 年)には比較的大き目の噴火があった模様でその影響か一段と水蒸気が目をひく。

変わらぬ景色ながらも，現地の取材では自然の成長，整備など歳月の移り変わりを強く感じるロケーションであった。

とても空気感が良く気分転換のできる公園で，自然の鼓動を強く感じる場所でもあるので道南，函館方面に赴く際は，大沼公園，五稜郭公園の組みで是非に訪れていただきたい。

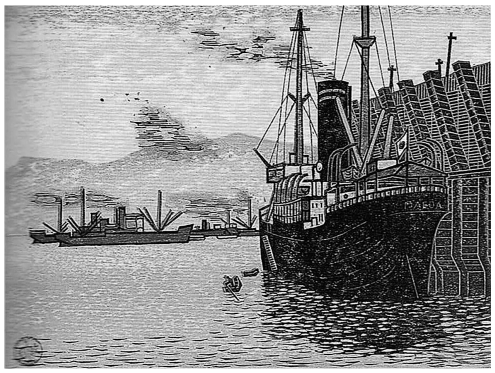
雲の流れがはやく駒ヶ岳が見え隠れする。緑を貫け湖面から吹いてくる風が心地良かった。

表敬制作



画　題／大沼公園
制　作／鳴海伸一
画　寸／180 mm × 242 mm
技　法／木版多色摺り
制作年／2021 年
備　考／前田政雄『北海道八景』表敬制作

2-2-2　北海道八景【小樽港】



前田政雄『北海道八景　小樽港』(所蔵　北海道立函館美術館)
北海道立函館美術館『前田政雄展』図録より転載

現地調査の結果
特定の場所に至らず

現地特定に至らず，今回は描き留めることはできなかった。

実作品データ

画　題／北海道八景【小樽港】
技　法／木版多色摺り(陽刻法)
画　材／紙・水性絵具
画　寸／181 mm×243 mm
制作年／1931 年(昭和 6 年)

かつての経済拠点で賑わいをみせる港風景である。客船か貨物船か判明できていないが黒っぽい船の係留が象徴的で他にも奥に 4 隻ほどの船体とタグボートらしきものも描かれており，煙突から出る複数の黒煙が当時の産業港の風景をより一層語っている。

比較的大きな空と画面奥の山稜，湾岸工事中なのか画面右には矢板擁壁のような高い壁がそびえたっている。

さりげなく，画面右の黒い船体の船名に“MAEDA”と表記されており，そんな遊び心に魅了される。

現地取材・検証

〈取材日〉2021 年 9 月 29 日
〈所在地〉北海道小樽市　※特定に至らず
〈検　証〉

小樽港はかつてニシンで賑わった時代や，戦時中などその時代の情勢で大きく変遷を遂げてきた港湾である。運河をはじめ，街の変化も浅く知識として知っていたので前田作品のままの風情を拝見できるか否か大きな期待はしていなかった。

作品画面からの情報は港の奥に見える山稜，船の係留位置から手宮側からねらったものであることが推測できる。

しかし現在，埠頭が建設され倉庫や背の高い工場などができているため作品のような眺望が不可能となっている。色内埠頭公園―北浜岸壁―厩町岸壁界隈から朝里側をねらった立ち位置がもっとも有力と思われるが湾岸工事の安全確保のため立入は禁止。場所の確定も不可能であった。

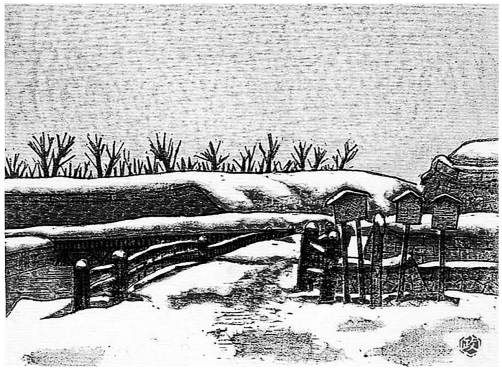
幾度かにわたり現地に赴いたが調査の結果，現時点でおおよその目安はついているものの，立入禁止となっており具体的な場所が特定せず十分な取材・調査ができなかったため本稿での表敬制作は行わないこととした。

数か所で湾岸工事が行われており，立入禁止の場所が複数存在する。

表敬制作

今回の取材・調査では具体的な所在地に至らず，表敬制作は行わない事とした。
引き続き調査を行う。

2-2-3　北海道八景【五稜郭】



前田政雄『北海道八景　五稜郭』(所蔵　北海道立函館美術館)
北海道立函館美術館『前田政雄展』図録より転載

年間何度か行く場所だが，毎回多くの観光客で賑わっている。

実作品データ

作　品／北海道八景【五稜郭】
技　法／木版多色摺り(陽刻法)
画　材／紙，水性絵具
画　寸／182 mm×244 mm
制作年／1930 年(昭和 5 年)

凛とした空気感の伝わる雪景色の五稜郭である。季節の頃は画面手前にみる地面の土の表出から初雪降る頃の初冬か，積雪の少ない道南ならでは浅雪の日と推測できる。または初雪に心踊ったその日とも云えるかもしれない。

樹々の葉はすべて落ち，平地部の緑は雪に覆われ，積雪部分の影や空に用いている青口の灰色がより一層冷たい空気感を強調している。

本墨から突出した大小の裸樹は，全体的に水平が強調された画面の中に奥行きとリズムを与えている。

現地取材・検証

〈取材日〉2017 年 8 月 20 日
〈取材地〉北海道函館市五稜郭町
〈検　証〉

画題のとおり，言わずと知れた「五稜郭跡」であるが，場所の特定には作品画面右の石垣と橋を目当てに辿ったため至難はなく，安易に特定に至ることができた。五稜郭タワー麓，正面入り口で多くの観光客が往来し，現在ツアー客の集合・解説場所となっているため，スケッチでそこに立ち留まっているには通路を塞ぐため，少々心苦しい立ち位置であった。

史跡とあって現状も前田実作品そのものであった。途中，橋の形状などが変化している時期があったようだが幸い，構築当時に近い状態での取材ができた。これは記憶に新しい箱館奉行所の再現もそうであるが，本来の姿に戻そうと調査・再現されている函館市の取り組みの恩恵である。

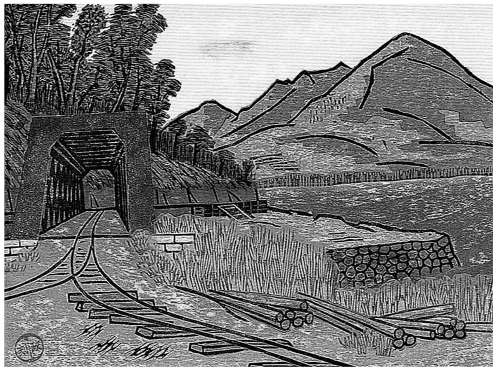
構図は一の橋と二の橋を接続する半月堡の一角を見据えたもので，画面右に「刎ね出し」を配した構図が特徴的である。一の橋の手すりも当時のままの意匠であったが，忠実に再現したものと推測する。取材現在，本墨の外構は綺麗に整地され，饅頭型の植木など視覚的にも楽しめる観光地となっている。五稜郭という類まれな外構から，堀の外からやほかにも狙える画角度は当時でもあったと思われる中，本作品の角度と雪化粧をしたロケーションとなっている作品が複数存在する事は大変興味深い。前田の視点そのまま冬期の雪が積もった五稜郭を捉えてみたかったがスケジュール，移動手段，宿泊などの制限から残念ながら猛暑の日の取材となってしまった。

立ち位置は大きな広場であったが，観光客の導線でスケッチには多少の困難があった。

表敬制作

画　題／五稜郭
制　作／鳴海伸一
画　寸／180 mm × 242 mm
技　法／木版多色摺り
制作年／2021 年
備　考／前田政雄『北海道八景』表敬制作

2-2-4　北海道八景【支笏湖】



前田政雄『北海道八景　支笏湖』(所蔵　函館市中央図書館)
北海道立函館美術館『前田政雄展』図録より転載

静かな場所をイメージしていたが，観光地で賑わいをみせていた。バスツアーの経路か団体の観光客も多かった。

実作品データ

画　題／北海道八景【支笏湖】
技　法／木版多色摺り(陽刻法)
画　材／紙，水性絵具
画　寸／180 mm×241 mm
制作年／1931 年(昭和 6 年)

緑に塗装された鉄橋と山稜，湖面が均衡良く描かれた作品である。

手前に丸太がころがり，鉄橋を渡った先，ひと段下には何か材木などを置いたりする場所か広めの作業場が確認できる。

数ある展望箇所の中でも画面右の山は樽前山の一部と，風不死岳と思われることから千歳側からの景色と推測される。

自身の記憶のなかでは支笏湖畔に鉄路がある記憶がないので新鮮な風景画面である。

現地取材・検証

〈取材日〉2017 年 7 月 22 日
〈所在地〉北海道千歳市支笏湖温泉
〈検　証〉

道産子であれば校外学習やキャンプなどで一度は訪れている事であろう支笏湖の情景である。

支笏湖は主に観光地として支笏湖温泉，宿泊施設，土産店などが並ぶ千歳側，丸駒温泉やアクティビティ等で親しまれているポロピナイ側，キャンプ場のある静かな森林に囲まれた美笛側など色々な展望地点があるが，山稜から支笏湖温泉のある千歳側観光地より眺望する場所である事がすぐに判明した。当時の昭和 6 年頃のこの場所の雰囲気や賑わいは調査不足のため把握できていない。

先にもふれたとおり自身の記憶のなかでは支笏湖と鉄路が結ばれておらず，廃線のイメージが先行していたのであまり期待ができなかったが，現地に赴いてみて，思っていた以上に前田作品そのままの光景を目の当たりにした感激を今も回想する。自身の無知を嘆かざるを得ないが王子軽便鉄道の廃線跡で現在，千歳市指定有形文化財「山線鉄橋」として保存されており，2020 年 1 月には「王子軽便鉄道ミュージアム山線湖畔驛」が開館している。のちに詳細を学ぶため訪問しようとしていたが新型コロナウイルスの拡大によって臨時休館となり，機会を逃してしまっている。

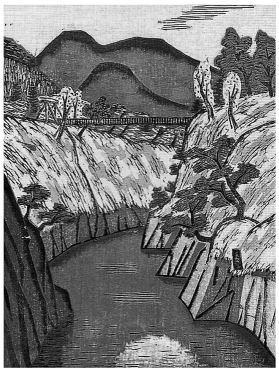
今は歩道橋として支笏湖観光に訪れた多くの観光客が往来している。鉄道ファンや地元民に愛され親しまれている史跡で，数多くの文献やインターネット上でもその歴史が事細かに紹介されている。

現在の立ち位置は歩道上になっているため，タイミングを計ってのスケッチであった。

表敬制作

画　題／支笏湖
制　作／鳴海伸一
画　寸／180 mm × 242 mm
技　法／木版多色摺り
制作年／2021 年
備　考／前田政雄『北海道八景』表敬制作

2-2-5　北海道八景【定山渓】



前田政雄『北海道八景　定山渓』(所蔵　北海道立函館美術館)
北海道立函館美術館『前田政雄展』図録より転載

現地調査の結果
特定の場所に至らず

市街近郊で変わらぬ賑わいであるが，コロナ禍のため人出は少な目であった。

実作品データ

作　品／北海道八景【定山渓】
技　法／木版多色摺り(陽刻法)
画　材／紙，水性絵具
画　寸／242 mm×185 mm
制作年／1930 年(昭和 5 年)

札幌の奥座敷，定山渓の渓谷を深くとらえた作品。初秋の頃を感じさせる色調が用いられており，奥に見える山なみ，碧深い豊かな水量の川の両端には切り立った崖を結ぶ橋も確認できる。

画題には定山渓とあり，温泉街のイメージが先行するが，その賑わいを伝える要素はあまり感じられないので，登山経路の途中や，小金湯方面，奥定山渓方面の可能性も推測できよう。

現地取材・検証

〈取材日〉2021 年 10 月 26 日
〈所在地〉北海道札幌市南区定山渓※4
〈検　証〉

画面は空よりも，背景の山，渕や川の形状，渓谷の様子がしっかりと描き込まれているので具体的な場所はすぐに判定できると思っていた。

しかし，定山渓の歴史は大正期から産業，保養地，観光地と其々に変遷を遂げており，とくに温泉街地域は幾多にわたる観光開発が進められ土地形状も大きく様変わりを繰り返しており，思っていた以上に難航した。

すぐに思いついたのは紅葉で有名な自然散策路の二見吊橋を眺める景色で実際に訪れたところ，画面の風景に近い場所はあったが作品とは一致しなかった。他にも山稜と，橋を頼りに 2 カ所の気になる地点を定めることができたが，立ち入ることが出来なかったため取材はひとまず打ち切りとした。ほかにも登山経路や宿泊施設からの眺望も考えられよう。

・奥定山渓方面(二見公園内)
　→立入禁止のため，先に進めず。
・宿泊施設の私有地
　→取材交渉の結果，危険部分のため立入禁止。

結果，幾度か現地に赴き，おおよその目安はついたものの一致する具体的な場所も特定するに至らず，検証として取材・調査が不十分であるため，本稿での表敬制作は行わないこととした。

渓谷，崖で，近年は保全工事も多く，立ち入れないところが複数あるため現地特定に至らず，今回は描き留めることはできなかった。

表敬制作

今回の取材・調査では具体的な所在地に至らず，表敬制作は行わない事とした。
引き続き調査を行う。

2-2-6　北海道八景【洞爺湖】

前田政雄『北海道八景　洞爺湖』(所蔵　北海道立函館美術館)
北海道立函館美術館『前田政雄展』図録より転載

変わりようのない景色かもしれないが，変わる必要のない完璧な風景ではないだろうか。

実作品データ

画　題／北海道八景【洞爺湖】
技　法／木版多色摺り(陽刻法)
画　材／紙，水性絵具
画　寸／181 mm×242 mm
制作年／1930 年(昭和 5 年)

言わずと知れた道南の風光明媚な観光名所，洞爺湖を眺望した作品である。

平面でみても円形湖の中央に島があるので，立面的にも島全体を納めがちであるが，画面中央に中島を象徴的にとらえ，左側奥に山稜を描き込んだ構図がなんとも印象的である。

島の形状と位置から，財田側の眺望ではなく，温泉街から中島を捉えたと推測できる。

また，作品の経年退色のせいか，または気候状況を忠実に描いたのかシリーズのなかでも曇天模様であるのが記憶に残る。

現地取材・検証

〈取材日〉2017 年 9 月 12 日
〈所在地〉北海道虻田郡洞爺湖町洞爺湖温泉
〈検　証〉

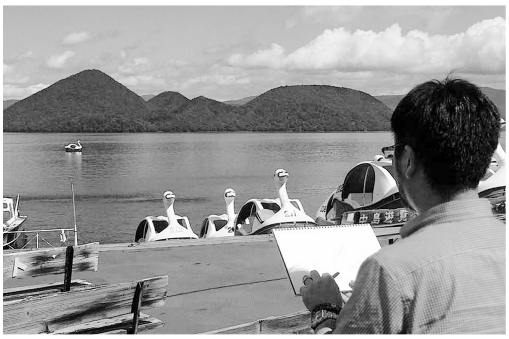
道産子であれば修学旅行やキャンプの定番地で一度は訪れた事があるのでは思う。さらに 2008 年には通称「北海道洞爺湖サミット」が開催されたのでその名を聞いた事があるのではなかろうか。

写真，スケッチなど洞爺湖をねらえる場所は，財田，月浦，仲洞爺，壮瞥，全体を見渡せる場所でも清水のホテル，成香の展望台など非常に多く，著者は画題を見ずとも水面と島の形からすぐに具体的な場所まで想定が可能であった。

作品では画面中央に配された一番大きな「大島」，その前に「観音島」，「弁天島」。右には小さな「まんじゅう島」と並ぶ島々が確認出来るので洞爺湖温泉側からの眺望である。桟橋は現在の老舗ホテル前，湖畔のモーターボート乗り場で材質は置き換わっているがほぼ同じ位置に鋼鉄塗装仕上げの桟橋も確認でき，ロケーションとしては当時と非常に近いままの情景と思われる。

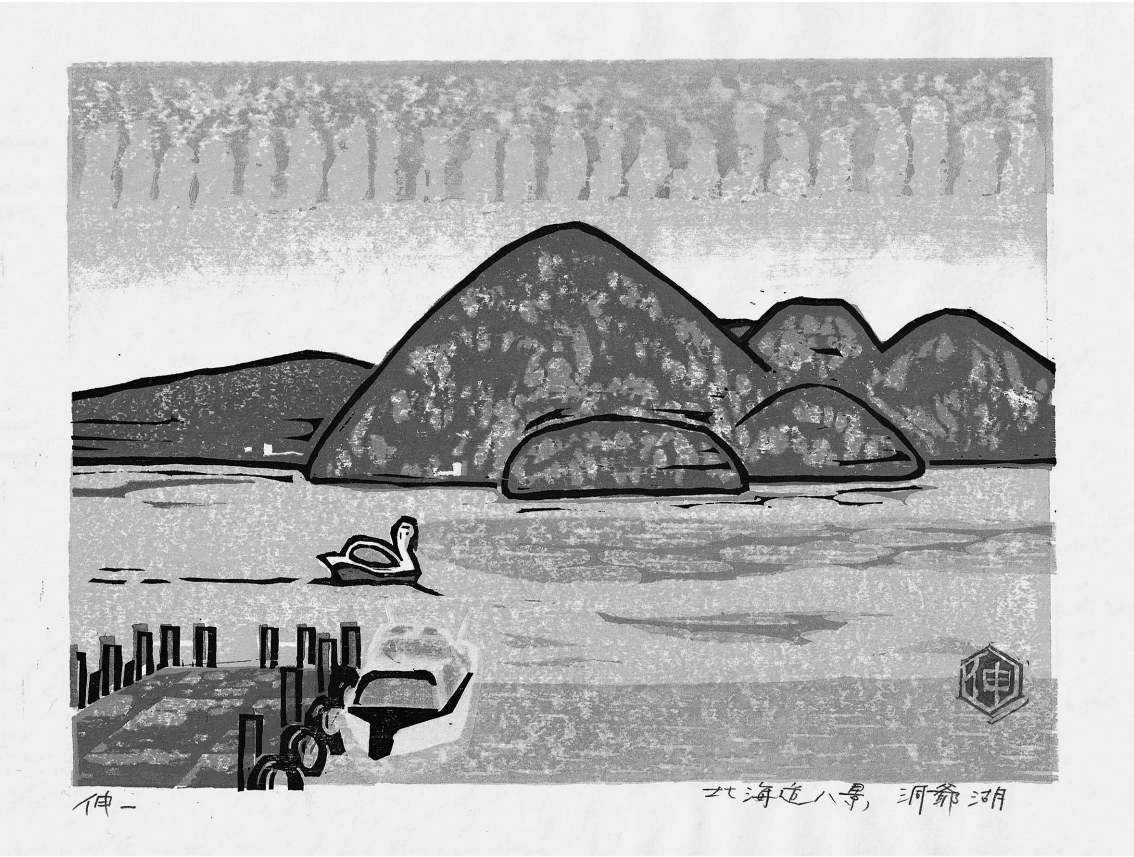
著者にはこの作品の洞爺湖はいまにも雨が降り出しそうな曇天模様に見えるが，まさにそうではなかろうかと推測している。洞爺湖は個人的にも年間，何度か足を運ぶ場所で，雨の日でしか感じ得ない洞爺湖の魅力がある。重苦しい湿度を纏い，うっそうとした樹々を集めた湖面に浮かぶ中島の存在感は恐ろしく思えるくらいの自然の息吹と迫力を感じる。

洞爺湖の魅力については，つまらぬ検証文ではなく五感で知っていただきたいので，これ以上はあえてふれない事とした。



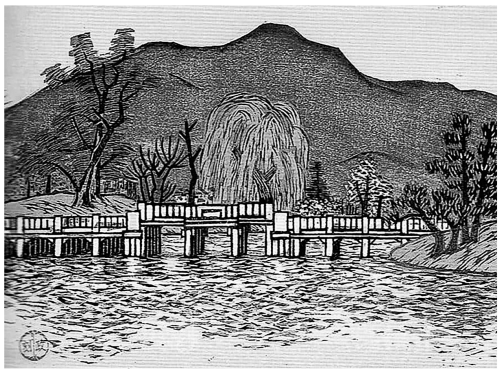
遊歩道が敷かれているので快適な立ち位置であった。自然ゆたかな場所でのスケッチは大変気持ちの良い時間であった。

表敬制作



画　題／洞爺湖
制　作／鳴海伸一
画　寸／180 mm × 242 mm
技　法／木版多色摺り，合羽摺り
制作年／2021 年
備　考／前田政雄『北海道八景』表敬制作

2-2-7　北海道八景【中島公園】



前田政雄『北海道八景　中島公園』(所蔵　北海道立函館美術館)
北海道立函館美術館『前田政雄展』図録より転載

コロナ被害のため，集いの場所としての公園機能は現在失っている様子だが，憩いの場所としては変わらずの安定である。一日もはやく公園に人が集える日を望んでやまない。

実作品データ

画　題／北海道八景【中島公園】
技　法／木版多色摺り(陽刻法)
画　材／紙，水性絵具
画　寸／177 mm×243 mm
制作年／1930 年(昭和 5 年)

札幌中心部の憩いの公園である中島公園内からの眺望で背景の山，画面中央に茂る柳の木と，白い橋が印象的な画面で，葉の落ちた樹々が秋の公園を彷彿とさせる作品である。

正面に横切る白い橋はその意匠と位置関係から，かつての食堂(旧迎賓館)を結ぶ名誉橋と推測するが，画面内にその建物の一部は確認できない。橋に加え山稜，広がる池が当時の様子を明確に色濃く残す要素である。

アーカイブスの写真集や歴史展などで，その時々の中島公園の光景を見る機会も多い。

現地取材・検証

〈取材日〉2021 年 10 月 18 日
〈所在地〉北海道札幌市中央区　中島公園内
〈検　証〉

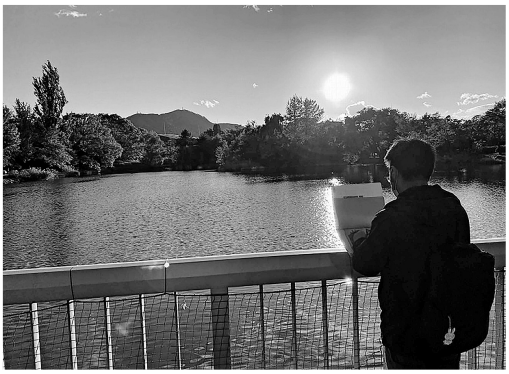
札幌市中央区，憩いの場のひとつである中島公園であるが，明治初期に貯水場だった場所が遊園地として整備が進み，のちに公園として博覧会会場やウォータープールが設置された時期など時代と共に変遷を遂げてきた。自身の記憶でも幼少の頃はよく遊びにいった場所で全体は変わらずとも少しずつ変化している事には気付いていた。

場所の特定には背景の山稜と柳の木を手掛かりにしたが，公園をひと周りするまでもなく，すぐにその景色に出会う事ができた。まもなく閉館する老舗ホテル裏，菖蒲池のボート乗り場の少し横にずれた場所から藻岩山をとらえている。

現在はコンサートホール，高層住宅などの建物が園内の緑から突出している。画面中央象徴的な柳の木は経年で低木となったか，周りの樹々に圧倒され少しばかり小さくなったように感じる。また丁度，本稿提出間際にコロナ禍で中断していた隣接する老舗ホテルの建替え延長や計画案も再開し，また昭和時代の景色は何らかの形で変わりそうである。

この作品も一見，変わらぬ景色のようにも思われるが，時の流れを強く感じる情景である。中島公園も年間何度も通る機会があるが通過する事がほとんどで立ち止まって見渡してみる事を忘れており，今後は公園の魅力を味わいながら歴史に想いを馳せながら自然を感じたい。

中島公園の歴史については書物をはじめブログサイトなどで肌身をもって歴史を見てきた方々が事細かく紹介しており，いかに市民に親しまれ，寄り添われてきた公園であることを実感する。

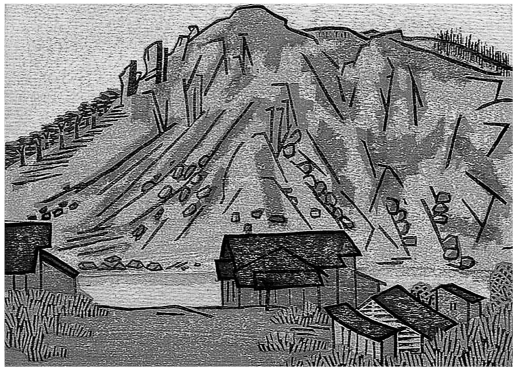


菖蒲池の渕から眺望できる立ち位置で，ゆっくりと落ち着いてスケッチが可能であった。
すぐ隣にはボート乗り場があるが，この時はコロナ被害のため休止であった。池にボートが浮いていると景色もまたちがって見えたであろう。

表敬制作

画　題／中島公園
制　作／鳴海伸一
画　寸／180 mm × 242 mm
技　法／木版多色摺り
制作年／2021 年
備　考／前田政雄『北海道八景』表敬制作

2-2-8　北海道八景【登別温泉】



前田政雄『北海道八景　登別温泉』(所蔵　函館市中央図書館)
北海道立函館美術館『前田政雄展』図録より転載

古を今に伝える温泉地であるが，コロナ被害のため人出は少なかった。大湯沼はコンパクトながらとても力強い景色なので，是非温泉街から足を延ばしていただきたい場所である。

実作品データ

画　題／北海道八景【登別温泉】
技　法／木版多色摺り(陽刻法)
画　材／紙，水性絵具
画　寸／175 mm×243 mm
制作年／1931 年(昭和 6 年)

画面いっぱいに山が描かれた作品で下部に沼が見えることから，地獄谷や温泉街から少しはなれた大湯沼ではないかと推測される。近似色でまとめ，力強い輪郭線はその山の存在感をより大きくし，麓にはごろごろとした噴石のようなものが散る涌泉地の山ならではの光景である。

迫力ある様を残しつつディフォルメ化した山肌や建物の雰囲気は可愛らしささえ感じる。

手前の居住機能のありそうな建物 2 棟のほか，小屋のような構築物も 3 棟確認できるが実際の用途がとても興味深い。

現地取材・検証

〈取材日〉2021 年 8 月 15 日
〈所在地〉北海道登別市登別温泉町無番地
〈検　証〉

全国にその名が知れわたっている北海道屈指の名湯，登別温泉源泉のひとつをとらえた画面で山，沼の形状から大湯沼と断定できた。山は活火山の日和山で画面では水蒸気はあがっていないが，実際に行くと時により噴気の発する音が轟き，硫黄の香りに包まれ，地球の活動を五感で感じる。

観光客でにぎわう地獄谷や温泉街から車で 7 分，少し傾斜の強い自然の森の中をゆっくり徒歩で 20 分程度の場所である。

立ち位置は現在の大湯沼駐車場から日和山を正面近くからダイナミックにとらえており，向かって山頂付近左側の突出した岩形が特徴的である。

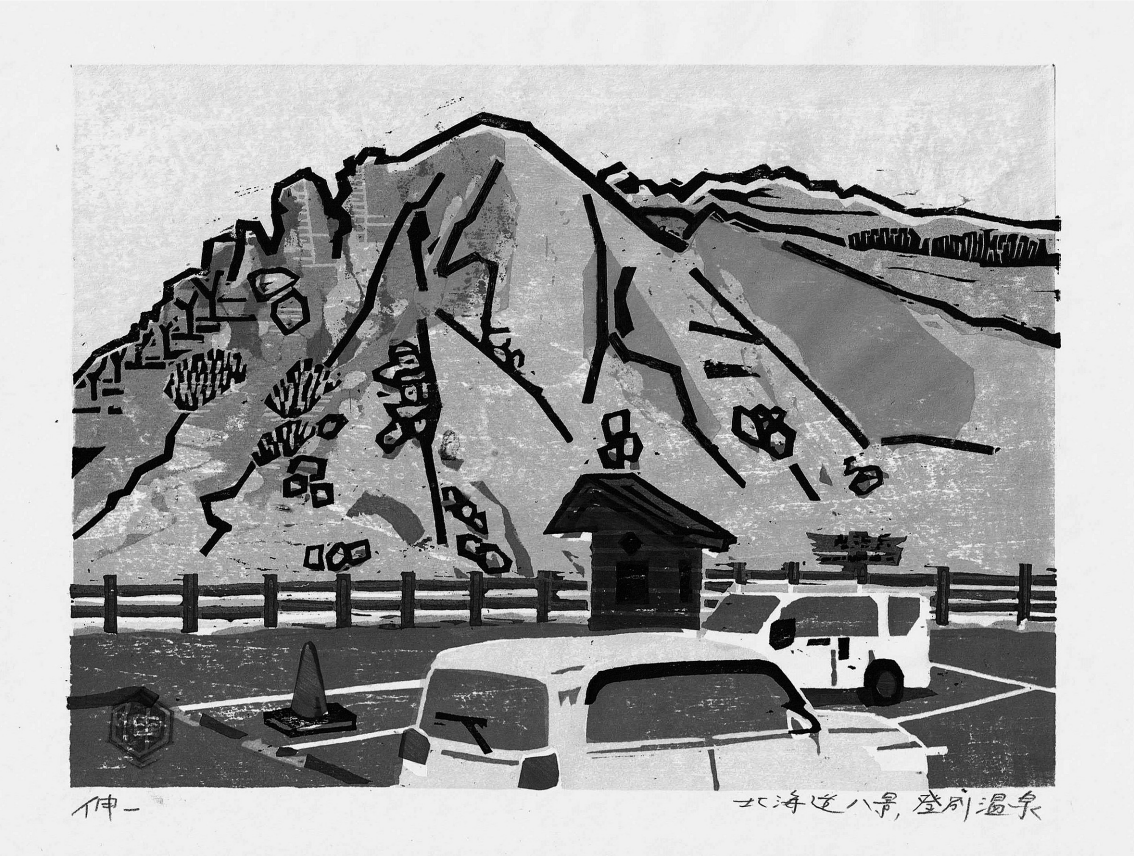
気にかかっていた手前の小屋は，硫黄採掘のための作業小屋だったのではないかとの説も得たが[※5]，調査不足で文献等での具体的な史実まで把握はできていなので，引き続き調査を進めてゆく。

大湯沼での，観光は徒歩だと 2 時間程度の所要時間がかかってしまうので多くの観光客は温泉街近くの地獄谷で足を留めてしまいがちであるが，2 日ほどの連泊で地獄谷，大湯沼と足湯，そして近くのカルルス温泉，クッタラ湖と合わせてこのエリアを堪能いただきたい。

郷里が登別の自身であるが，「登別温泉」はやはり自慢の地であり愛す場所ある。

駐車場からの眺望であるが，温泉街ではなく落ち着く場所なのでゆっくりとスケッチが可能であった。噴気音，硫黄の香りが記憶に残る場所である。

表敬制作



画　題／登別温泉
制　作／鳴海伸一
画　寸／180 mm × 242 mm
技　法／木版多色摺り，合羽摺り
備　考／前田政雄『北海道八景』表敬制作

3. 前田政雄のまなざし

3-1　画業とその足跡

ご縁を頂戴して以降，現在もヨレヨレになった図録や資料を持ち歩きながら前田政雄が見てきた道内外の山，川，街，史跡などを今もたどっている。今回作品の調査はわずか90年あまり前の八つの実景で，この歳月を近年と捉えるか，古と捉えるかは其々であるが，それでも当時のままの光景や趣が残っていることに強い感動を覚える。さらには自身が憧れ尊敬する人物が90年前に同じ位置に立って，同じ光景を目の当たりにしていたとなると喜びはひとしおである。

毎回，その光景に出会えるか否か期待に胸が躍るが「大沼公園」，「五稜郭」のように整備保存・復元されている景観もあれば「登別温泉」，「洞爺湖」のように当時とそれほど変わらぬ自然もある。「小樽港」や「定山渓」のように法や規制によって安易に立ち入る事のできない現地もある。

「支笏湖」に関しては山線鉄橋の保存がなければ画面はどこか寂しさが漂うであろうし，「中島公園」のように，変わらぬ景色を留めながら新たな施設やビルが景観に加えられることもある。

前田の作品には山や自然が描写された風景作品が多く，郷里である北海道の景色も多数ある。後半になると石庭や桃，グラスコップ，鉢花など生活の中の何気ない素材をモチーフに用いられている。さらに蔵書票も数多い。

そして心揺さぶられた風景やモチーフなのか，再度煮詰めたものなのか大小に関わらず繰り返しその題材を扱った作品を制作していることも図録[※3]では多くみられる。創作版画の興隆期に時代の先端を模索し，流行を追った制作や習作，研究作品はほとんど見受けられない[※6]。そんな真っすぐな視点で生涯「版画業」と向き合ってきた版画家，前田政雄のまなざしは真っすぐに自然を愛で，郷土を愛し日本人の心を摺りとった実直な版画作家の姿を感じた。

これからも引き続き，前田政雄の背中と足跡を辿らせていただきたい。

3-2　表敬制作をとおして

さらに今回，少しでも前田作品を理解し近づきたく，駆け足であったが表敬制作もさせていただき本稿要旨の実践のひとつとした。これはもちろん実作品風景の現状をスケッチし，版に起こして摺ったものであるが，下絵づくりから「彫り」，「摺り」を実際に制作させて頂いて，「版画職人」[※7]という肩書がふさわしい作品を残されたという実感であった。

その版表現に着目し，以下に簡単ではあるが「北海道八景」の版表現にみる独自性をご紹介したい。これらの表現は同じ創作版画興隆期の他の作家にはあまりみられない表現で前田のオリジナル性が強い特徴と思われる。

3-2-1　『北海道八景』作品全体について

調査不足，現物資料不足で制作に関する版木，摺り紙，絵具，摺り道具についての情報は皆無で当時の制作環境が見えてこない。戦中戦後，其の時世で仕入れ困難な局面もあるので，どう乗り切ってきたかなど，僭越ながら同じ作り手として興味深い部分が多い。

たとえば画面寸法に対し，思っていた以上に彫りが細かく，強い板目も感じることが少ないことや合板にみる欠けや継ぎ目もないのでもしかするとサクラやカツラなどの硬めの版木を使用していた可能性や，つぶしの効くバレンを愛用していたのかもしれない。摺りについても絵具は厚くのっておらず，鮮やか過ぎない色面なので粉絵具，顔料，粘材などの使用方法，伴う紙の湿し具合など興味深い。

紙については，保管状況にもよるがカビ，シミなどを強くよせておらず，一部，ヨリなどもあることから手漉きの和紙を用いていたと思われる。絵具もしっとりと染み込んでいる様子からドーサも弱めではないかと推測するが，その立証はなく，これらはあくまで仮説である。

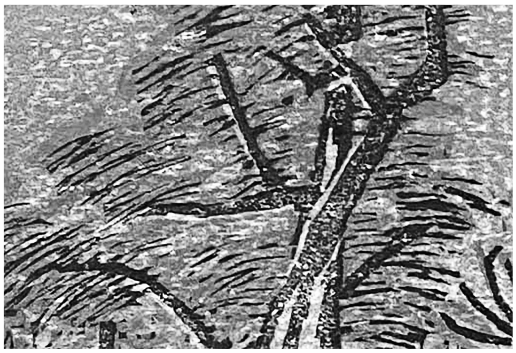
各色版，見当が非常によく重ね合わせ摺られていることから，転写は伝統的な和紙を用いて見当ごと摺った転写と推測する。

見当は，実作品右下のわずかな絵具移りから内見当のカギを使用していると思われるが，見当線の外側を使用しているところが興味深い。もしくは何かを用いた外見当であることも推測できる。

作家や作品を語る上で，必要のない情報かもしれないが，版画を制作する者でしかわからない苦労や技術があり，実は継承するにあたりとても重要な要素となる。記録※3 によると札幌，函館，旭川で版画講習会も開催しており，逃さずにはいられない前田の足跡のひとつでなんらかの実際の制作を知りたい想いでいっぱいである。

3-2-2　樹木・草木の表現

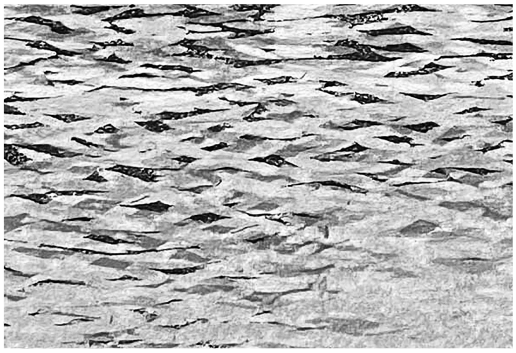
特徴的なものでは「大沼公園」，「支笏湖」，「中島公園」に強くみられる樹の表現は，緑系のベタ版を先に摺り，その上に墨版で左右にストロークのような表現を重ねている。また地面から生える草や低木の表現も 1〜1.5 mm 程度の駒透で細かく連続して彫り，角度を変えて密集感を演出している。



著者所有作品「北海道八景　中島公園」より部分拡大

3-2-3　水面の表現

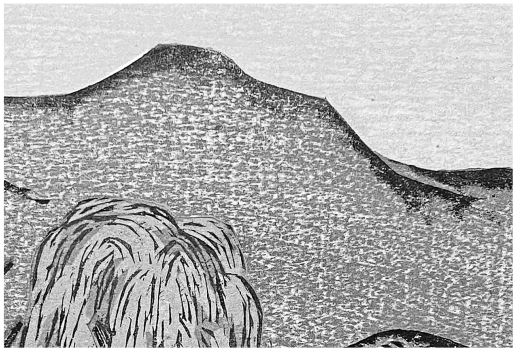
「中島公園」にその表現効果が色濃く出ているが，水面のわずかな波打ち表現を，駒透きを使っていろいろな角度から彫り，小さな欠片のような形状を色版ごとに重ねて複雑に写る水面を表現している。「登別温泉」と「五稜郭」以外のほとんどの作品に共通する水面の画肌である。



著者所有作品「北海道八景　中島公園」より部分拡大

3-2-4　山稜の表現

『北海道八景』ではほとんどが主版（墨）を用いて山の形を明確にし，境界を分けているが「定山渓」と「中島公園」の奥に見える山稜を蒼の色面で輪郭を濃い色でぼかしを用いているのが特徴的である。



著者所有作品「北海道八景　中島公園」より部分拡大

4. 諸行無常　―継承と刷新―

時は移り変わり，進化を遂げる。歳月の流れは個々で大きく変わってくるが今回，90年あまり前の作品の実景をたどってみて思ったことは，どう残っているかと残すべきか，代謝する意味と変わらぬ意味を実感した。変わらず保てるものもあれば，変わらない事によって衰退する事もあろう。

もし前田が今の同景色を見たならばどう思うのであろうか。変わらぬ風景に安堵するのか，変わりゆく風景を寂しく思うのか。逆に変わらぬ姿勢に無念を感じることもあるかもしれない。

これはありがたい事に，自身もある程度の歳月を生かして頂き，下山に向かう人生の中で想うべきことである。常の世はない。著者は創作版画の風景を観ていつも思うのは，よく描けていることやいい画面であること，上手に摺られているかなどではなく，ぬくもりと時の大切さと尊さである。

さて，身の程知らずの事であるが視点は身辺の静観に移りたい。近年，生き残りをかけてどの教育機関も刷新を急速に進め，高尚な学びと学位授与を謳っているが，学科紹介に歴史を都合よく用いてはいないだろうか。

変わり目を変革運営してきた努力はもちろん称えられる功労ではあるが，目先だけの事を考えるあまりアーカイブスという歴史の引き出しを整える実践もないまま，さも継承してきましたと云わんばかりの姿勢で学科を誇るのは先人の功績を横取る様であまりにさもしくはなかろうか。

過去を振り返っても生産性や利益がないことは間違いない。しかし，大切なことは卒業生や先達が経てきた想いを汲み，記録・継承しながらしなやかに変化する必要性ではなかろうか。さらには根幹が変わらねばその代謝の意味は全くない。人も環境も変わることは進化には欠かせないが，心の栄養がない腐敗や枯渇した樹には葉も果実も実らない。乾燥しきった枯草原や砂漠をみても魅力は感じない。

余談であり，立場上云える身分ではない事は十二分に承知しているが，苦言を呈し，あえてここに部外者として嘆かせていただいた。部外者[※8]でしか見えない事もあり，部外者にしか聴こえない声もある。

5. おわりに

2019年1月からの新型コロナウイルス感染症拡大に伴う緊急事態宣言での外出自粛要請で思う通りに移動できなかった事や，私事コロナ禍で看病もできないまま家族との死別，身内の大病・治療などで死生観を強く想い，これまでに経験したことのないパンデミックのなかで，あまりに早く進む時の流れに今回の調査と紀要執筆は断念していた。

しかし，この前田の残した作品，生涯，そして八景をたどってみて改めて明確に感じたことは，時は待ってくれないということであった。いつ景色は変わり，消えるかもわからない。人の命も同じである。残しておきたい事，残すべき事，伝えておきたい事を今やらねば，全てを埋没させ失うことを改めて実感したことが奮起となってなんとか可能な限り調査・実践することができた。

この悪しき新型コロナウイルス感染拡大の時世でも気づく事は数多くあり，不幸中の幸いとも云えるかもしれないが，やはり『害』としか言いようがない。感染し重症化するといとも簡単に命を奪われる時代で，蓮如上人「白骨の章」の『朝には紅顔ありて夕べには白骨となれる身なり』ことを強く，より強く実感する新型コロナウイルス感染拡大の3年目である。

一秒一秒を大切にありがたく過ごし，前田政雄が見てきたような美しく綺麗な自然と景色を見て，心

豊かに，素直になってこの時代を乗り越えたいものである。

最後に，現在諸都合で出品できない状況にあるが，前田政雄とのご縁をつないでいただいた国画会版画部に深く御礼もうしあげます。

［注釈］

※1　国画会前田賞はご遺族の遺志により基金として設けられた賞で昭和 51 年から設置された。
※2　前田の作品を取り扱う，創作版画コレクションで機関紙を発行している。
※3　北海道立函館美術館『前田政雄』展図録を基本資料とした。
※4　現地調査の結果，具体的な場所を特定することができなかった。
※5　現地，駐車場係員による証言。
※6　画商，ギャラリーでのカタログレゾネを参照した。
※7　自身が感じたイメージであり造語である。
※8　学科，領域内などの対応実例をとおし，肌身で感じざるをえない感覚である。

・寸法表記は縦×横，単位は mm を用いた。
・２章，実作品データは函館美術館『前田政雄展』図録のデータに著者の所見を加えた。
・２章，現地取材・検証の取材日はスケッチをした主たる日とした。
・図版の転載にあたり，輝開および北海道立函館美術館より転載許諾および確認を頂いた。

［参考文献］

・吉留直輝著『版ニュース No. 6』（発行：輝開／2000.10.3）
・図録『前田政雄展』（発行：北海道立函館美術館／2006）
・『版画芸術 No. 92』（阿部出版／1996）
・『版画堂 104』（有限会社版画堂／2014.6）

［謝辞］

本稿の調査に際し，多大なご協力を頂きました事に心より御礼申し上げます。（敬省略）

・吉留直輝
・鳴海志津香
・創作版画コレクション『輝開』